
一五枚の夜景画（散文詩集）

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一五枚の夜景画（散文詩集）

【著者名】

山之内 博道

Z9687F

【あらすじ】

いつの頃からだろう。私の中に、一つの、遠くけぶる心象画が存在し、私は夜毎、その風景の陰鬱な絵画館へ遊魂してさまよつた。それは気の遠くなるような心象の冒險であつた。おもぐるしい朝の目覚めに私は還魂して現実との軋轢に苦しんだ。しかし、夜が来るとい、私は見える幽谷のあの、奇怪な絵画館へと再び遊魂して凶脳するのだった。なぜなら、夜は決して秘密を明かさず、私の前で永遠に一つの謎としてあり続けるのだから。

小序

小序

いつの頃からだろう。

私の中に、一つの、遠くけぶる心象画が存在し、私は夜毎、その風景の陰鬱な絵画館へ遊魂してさまようのだった。

私の心象画集には夜の絵画がたくさん収納されていて、それは古びた幻想の絵画館に展架されているのだった。

狂おしい夜、私はそれを借り受けて、一人幻想絵画館に遊ぶこともたびたびだった。

ある夜、私は遠い思い出にふけりながら、ふとその夜の絵画集のことを思い出していた。

もう、何十年もほつたらかしにしていたその画集、再び開いて見ることを私の心がひどく欲しているのだった。

それは気の遠くなるような心象の冒険であった。

そして、夜の絵画館での凶脳の一夜が終わると、おもぐるしい朝の田覚めに私は還魂して現実との軋轢に苦しむのだった。

しかし、再び、夜が来ると、憑かれた様に、私は見えざる幽谷のあの、奇怪な絵画館へと再び遊魂して凶脳するのだった。なぜなら、夜は決して秘密を明かさず、私の前で永遠に一つの謎としてあり続けるのだから。

第1の夜景画

第1の夜景画――始まる

朽ちた倒木を超えて、夜の中を一人歩いてゆく少女があった。

白いドレスは長く引きずり、頭には花冠が無造作にあり、夜風にたなびいていた。

うつやうと繁り、星さえ見えない森の中に、光るものは蛇の眼と樹間に潜むふくろうの見据える瞳だけであった。

地に盛り出た、根に躡いて、ざざりと少女は倒れる。

その青い眼はキラキラ涙に濡れ、拭つて見上げた闇を夜鷹が、ギー

ツと、かんだかい声を残して飛び移る。

少女ははつとして首をすくめる。おびえきつた少女は息を弾ませ走り出す。

木の間を抜けて、急に草地が開けると、そこには、崩れかかった城館が黒い旗をゆらめかせてそそり立つて居るのであった。

妖しげな地靈のすり泣きが籠つたように、響き、そのとき、樹海の黒い水面から真つ赤な月が

ゆつぐつと、のぼり少女の影を長く草の上に漂わせた。

月明かりに照らされた草地には、馬車道がつながり、彼方の城まで続く。

どこからか、かすかなどぎめがちな細い女の声が、少女の髪毛をなぶる風になつて、

低く打ち響き

少女はあの城へ行かなければならぬ。

緩やかな夜の冷氣をいまだ含んだ微風がそれとわからぬほど、漂い流れていった。

血を滴らせたような月は、城の肩の辺りを徘徊し、黒雲はちぎれてつきの面を不気味に掠めた。

垂れ込めた、夜空には見下ろす靈氣の大きな瞳があり、少女はそれを確かに感じるのだった。

第1の夜景画ここに終わる。

第2の夜景画

第2の夜景画ここに始まる。

「お父様、ほら蛾が、、、、、、。」

「あつ、もういな

くすんだ赤いピロードを點り詰めた部屋にローソクは熱い涙を燭台に垂らし、またに燃えぬきよつとしていた。

炎が燃れて二人の髪も揺らいでいた
「弟弟、弟弟、火が消えそうじゃ。もう一本つけよう。」

『お父様、一本だけ、じゃなくともつともつと、こいつぱにつけて、、、

「アーティストとしての欲求が、このままでは叶わない」と、アーティストとしての欲求が叶わない

「だが、おまえ、口ウソクはそつ無駄に使つちやいけないよ。じゃ、もう2本つけてあげよ。」

それでも、うんとあかるくなるから、

長い装飾のいつぱいある、ローブのすそを

窓の外の夜をぼんやりしながら

見一めでいた

『雪はやんだらしいわ。』彼女は誰に訴うともなくそうつぶやいた。

つてはいるのだった。

「眠つてしまつた、、、、、」彼女はまたそつとつぶやいた。

彼女が大理石の赤ヘルを横切ると、その空氣は少し

の炎もついで燃えてしまつた。

彼女は重い鉄門を押し開けた。

歩みにつれて、夜の中で、草は少女の足の下に踏みしかれた。
ゆっくりと、歩いて雪原の境田まで来ると、もうそれから先は彼女
は行けないし

また、行つてはいけないのだった。

『あの向こうに何があるのかしら?』

彼女はほっと、ため息をついた。

星もなく、暗い空、そして、夜は遙かな雪原の彼方まで、
まるで永遠を思わせて続いているのだった。

第2の夜景画ここに終わる。

第3の夜景画

第3の夜景画――にはじまる、

私が眠りの馬にゆすぶられて何処と知れず夜の中をさまよつて歩いていたとき、

いつしか、かなたに白く光る妖女たちの舞う、荒れた野が望まれるところまできていたらしかつた。

彼女達は皆、一様に丹砂の赤い瞳を瞳に燈し、唇には青い燐の紅を塗つていた。

そして、赤い瞳と青くぼんやり燈る燐の光が私の前方に輪を描き、揺れさんざめく宴を形作つているらしかつた。

私は眠りのおとなしい馬から、そつと、降り、いつか、ガシンとした、防具を身につけ、矛を抱え、もう一方の腕には盾をかかげているのだった。

そのとき、ゆがんだ笑いが私の脳髄の中を駆け巡り、神経叢のかいまをゆるく旋回しだしたのだった。

私は盾を取り落とし、静かな狂氣が去りがてに渦巻くのをじっと、こらえていた。

私はその間、視覚を失っていたのかもしね。やがて視覚がよみがえり、と、同時に

私の目の前に紫の光る田をした女が一人いた。

横たわつた、私を静やかに覗き込み、不思議そつて見つめているのだった。

しかし、上空には薄羽色の大きな鳥が鳴き騒ぎ、私の胸には毒蛇の牙が折れて突き刺さっていた。

妖しげな女はまるで童女のような、笑いを唇に浮かべて軽々と走り去つてしまつたのだ。

薄縁にすきとあるガラスの胸は私を愛焼へと誘い、見えない小さな羽虫が地の上にそよいでいるらしかつた。

そして、闇は、彼方に鋭い光の束で刺しぬかれてもがき、透明な血を流してのたうつていたのだった。

第3の夜景画ここに終わる。

第4の夜景画

第4の夜景画[1-1]に始まる。

私が一人、暗い夜の中に佇んでいると、それはいつのまにか、キラキラした一つの光る眼になっていた。

瞳はぐぐもり、うずもれて、次第に光りを失つていいくかのようだつた。

思い出がとめどもなく奔逸して、收拾が付かないほどだつた。

私の脳髄に重く滴る髄液の発光はしばたたいて静もつていた。

うつるな、光りの細い糸が、私のまなこを抉り出し、ビームとも知れず落ちていく。

ビームでもなく、それは広い紫の平原に。

私は幾つにも、枝分かれした影になつていて。
どこへたどり着くのかも分からぬ。

私はひたすら落ちていく。

どこへでもなく、紫の平原に。

私には見える。

私の不在の瞳に一つの紫のゆらめきけぶる平原が。

私はどこからともなくそこに降り立つ。

軽やかに、そして私はそこでゆっくりと歩み始める。

私は薄い皮膜を通して何かを見ようとしたのだろうか。

影が流れ物象が皆かすんで遠ざかって行くとき。

私は遠くで巨大な鐘が重々しく鳴るのを感じる。
なぜだらう。

その音は私の鼓膜を緩やかに破るほど重々しい。

私は紫色の霞の塊がまるで水中に絵の具を流したようにたなびいて
いるのを見る。

私の目の前をかすめ、私はそっと、腕を伸ばして、その一筋の靄を
捕らえた。

それはひんやりとして、

掴んだ指は桑の実を潰したような鮮やかな紫色に染まつたのだった。

第4の夜景画は終わる。

第5の夜景画

第5の夜景画――にはじまる。

重々しい夜陰は私の目を閉ざしていくすぶつていた。
私は一体何に追いかけられていたのだろう?

でも逃げなければいけない。心がそう命じていたのだ。
足早ににげるわたしのあとにそいつは迫ってきていた。

ずしりずしりと何者かの重苦しい足音が私の後ろに近づいていた。

足音は次第に大きく響いてきた。

「早く早く、あの老婆にもらつた、タロットカードを、お前の周りに並べるんだ。

早く魔方陣を作つて妖魔が近づけないよつこ、手遅れにならないうちに。」

誰かかがそう私に叫んでいたようだつた。

私は急いでポケットを探り、ボロボロになつた羊皮紙で作られた、タロットカードを

取り出し、震えながら草の上に並べ始めたのだった。

やがて、並べ終わると一つの口っぽに入つた死のビームを抱えてしやがみこんだ。

と、木の葉を震わせながら、大きな陰獸が現れた。

私は息をこじりして、見つめその時に耐えた。

しかし、陰獸は私が見えないようだつた。
やがて暫くねめまわしていたが、諦めたように、
低い絞るような、うめき声を残して去つていつた。

そいつが木の葉と下草の彼方へ消え去ると、
それと同時に月が垂れ込めた雲のなから、その真つ赤な血のにお
いを
立ち込めさせて、姿をぬーつと現したのだった。

そうして、夜の静けさが一面に広がつていくのだった。

しかし、ギーギーと夜の鳥が月光におびえたよつて、そのとき飛び
立ち、一瞬
深い月光の沈黙を破るのだった。

第5の夜景画[1]に終わる。

第6の夜景画・第7の夜景画

第6の夜景画――始まる

私は夜の黒い肺臓の中に、ぐらぐらする頭を抱えながら歩いていた。私は降り積もった枯葉の上を、その暗さに、じつと、見張られながらどこまでも歩いていった。

やがて、こなもりとした樹木のアーチの中へ入り、その暗さの中に、ほつと一息を付いた。

確かに雨が降つてきているようだった。

私はその一滴を手に受け止め口に持つていった。しかし、それは木の葉のにおいでもなく、夜氣のにおいでもなく、それはなんとも不思議なにおいがした。

底深いうめき声が地の中から木々の間に木霊し、私を恐怖のどん底に突き落とした、

私は激しい嘔吐と眩暈を覚え、よろめく、足で樹間を駆け抜けまばらな林の中に出た。

そして、私は淡い月の光の下で見たのだった。

私の手のひらで受けたのは雨ではなく、べつとくとした血糊であったことを。

第6の夜景画――元に戻る。

第7の夜景画。

第7の夜景画に向かって始まる。

暗い春の野を私は幻覚に狩られながら渡り終わり山道に差し掛かっていた。

彼方に赤く燃えるような妖花が咲き乱れ、底へ吸い寄せられるように歩んでいたのだ。

ふと、胸の痛みを覚え私はその一輪をつんで香りを吸い込んだ。

私はその瞬間、自らの部屋に、消えかかったランプの下で一編の物語を書き綴つている自分に

還つた。

外には雨が降っていた。

それとも、葉先から夜露のしたたる音なのだろうか。

かすかで遙かな夢幻の世界へのそれは一つの扉だった。

私の紙の上に、1羽の小さなみみずくがづくまつっていた。

私はそれが指し示す方を見た。

壁にはいつの間にか穴が開いて一つの通路に成っていた。

私はみみずくのゆづくじした、歩みに従いながら、そこへ入つていつた。

そこを出ると一面の暗い水辺が広がっていた。

水の上には、真っ赤なつる草がからみあい私の目を驚かせた。

大きな透明のしづくが私の上に滴り木々は血を吐いて狂いもがいていた。

私の頭に一つのうつろな春の夜があった。

そして、いつのまにか、みみずくは飛び去り私は一人春の野に退かされたのだった。

第7の夜景画ここに終わる。

第8の夜景画

第8の夜景画ここに始まる

その頃、私は1匹の老いた猟犬を連れて夜の森をさまよい歩いていた。どこからか、細波のような音が聞こえやがて、樹幹を行く微風が囁ぎ、見上げると木の間から血色の月が覗いていた。

まるで妖しい巨大な瞳のように。

私はかなり以前から猟犬の姿を見失っていた。

歩むにつれて、いよいよ森は暗く辺りの空気は灯心の周りのようにほの暖かく沈黙しているのだった。

遠く犬のほえるのが聞こえた。

それは消え行く木霊のようにかすかだった。

私は自分の意識が温まり、また冷えてゆくのを感じた。

私は肩の銃を下ろし立ち止まつた。足元の細い草はいつしかビロードのような厚い芝地に変わつてゐるらしかつた。暗くてよく分からなかつたが、そこは小さな空き地でもあるらしかつた。

私は上を見上げた。月もいつしか、雲に覆われたらしく空は暗黒だつた。

私は再び歩み始めた。私はまた森の奥深く入ろうとしていた。

ガサガサと下草のざわめく音が私の耳に聞こえた。私は血が凍るようになづえ銃を構えた。

しかし、暗黒の中に銀の目が二つきらりと光つた。それは私の猟犬だつた。

私はほつと安堵して呼び寄せた。犬は鼻を鳴らして私の手のひらをぺろぺろと舐めた。

私は腰の袋から干し肉を出して犬に与えた。

そのとき私の頭上でバタバタと何かの羽音がした。ふくろうか、夜

鷹か。

私は半ば無意識に銃を向けてそれを撃つた。

鳥は高い木から、どさりと芝生の上に落ちてきた。

銃声はどこまでも、暗い森を陰々と響いて消えなかつた。

私は何者かが、薄笑う声を聞いてぞつとした。

しかし、それは風が木の葉を吹き抜けた音であつた。

犬ははや、落ちた獲物を咥えて、私のそばに帰つてきていた。

そしてどさりと、その鳥を私の足元に投げ出した。

私は何を思つていたのだろう。

急に激しい頭痛に襲われて銃をほおり出し、その場に蹲つた。めまいがして吐き気がこみ上げてきた。

やがて少し収まると、私は激しい渴きを覚えた。私は抑えがたい渴きに今、打ち落とした鳥を

ナイフで引き裂き忘我のうちに、その血をすすつていた。

血は舌の上を小気味よく回り、私の渴きを癒した。

私は更に腿の肉を切り取つて食べたのだった。

私はしかし、再び襲つた頭痛のため、今度は意識を失つてそこ倒れてしまつた。

朦朧とした意識の中で大きな牙が私を引き裂くつと迫つてきていた。

どれほど建つたことだろうか。私は再びそのくらい森の中でわれに帰つていた。

まるで酔つたように私は何も考えられなかつた。

そのとき風が吹いてきた。風のかすかな響きのなかに、私は誰かが私に語りかけているのを感じた。

はじめは、そつと諭すように、しかし、やがてそれははつきりした声になり、私は聴いたのだった。

それは私に言つていた。

「お、お、おまえは、なに、をたべた、のだ、」

「もつ、一度、よく、みて、みる、」

突然、真っ赤な月が雲間から現れ木々の間から月光が差し込んだ。
そして私は見たのであつた。

食い散らかされて、手足のもぎ取られた嬰児の屍骸を。

第8の夜景画[...][...]に終わる。

第9の夜景画・第10の夜景画

第9の夜景画ここに始まる。

それは夜だった。いつ果てるとも知れぬ夜だった。

一人の小人がよちよちと、その、陰惨なにおいのする森の中に消えていくと、夜は一つの獲物を射止めた獵人のように、うちふるえるのだった。

そして森は密かに、血をながして 小さく笑うのだった。

そんな夜に私は生きていた。そして「夜は私を生かす血液なのだ」とつぶやくのだった。

ロウソクの暗い炎が揺らめき、私をいくつもの、狂想へとかりたてた。そして、

わたしのなかには痺れと恐怖が混在しているのだった。

「いけない、その毒をのんでは

しかし、私はすでに、なみなみと注がれたその毒を幻想の暗い岸辺に投げ入れてしまっていたのだった。

第9の夜景画ここに終わる。

第10の夜景画ここに始まる。

暗い低い地平線に、私は確か横たわっていた。目を上げて陽が何時

間か前に沈んでいったほつを見やると草地せわせわと、無風なのに、怯えて騒いだ。

「静に。」私のではない声がしかりつけぬとよひやく、草は麻酔的な安らぎに浸されていったらしかつた。

そのひれ伏した草地を越えて丘の向こうに私の幻想の翼は傷つき血を吹いてあえいでいた。

暗い靈の火たちが草地を黒い空氣でかき乱していく者不気味な影を立たせた、

笑うでもなく歩むでもなくそれらは草地の中に余りの静けさで立ち尽くしていたのだった。

私は鳥の羽ばたく音を聴いた。

眠りは駆逐され、私は起き上がりつてその鳥を待つた。

小黒い空を見上げ、私は真上でその羽音の止むのを感じた。それから私の目の前にどさりと何かが落ちた。かすかな光の中に私は見たのだった。

息絶えた嬰児の屍骸を。

そしてまた夜がひたひたと迫ってきていた。

第10の夜景画に向に終わる。

第1-1の夜景画

第1-1の夜景画にて始まる。

ある晩、一人の影がとぼとぼと道をたどつていった。血色の月が崩れかけた寺の、屋根から覗き、陰惨な花々が見えない空間に咲いているような宵であった。

「ああ、なんとこう夜だ」影はつぶやいた。すると、その声がいくつ者輪になつてよじんだ

空氣の中を伝い妖花の群生する暗黒の邊原まで響いて、花びらをまばらと散らしたのであった。

月が木々の間から差し込み、影はまた、森闇とした、森の中の小道を歩んでいた。

ふくふくの声をえ聞こえず、幾千もの葉のざわめく音が重く響いた。

「なんとこう陰惨な夜なのだ」影はまたつぶやいた。長く影が木々の間を幽靈のように引いていた。

未知が死き、森の暗さが永遠に續くといつまでも来る、ナーナーの縊死体が枝からぶら下がつて纏目に添つて緩せかにまわつていた。

黒い古びたマントをはおり、髪はまづのその死体はかつて、血走った目を見張り、鼻からじす黒い血を垂らしていた。

月の光がその amp; #34847; のよつた顔を照らした。

影は訪ねた。

「どこへいけばいいのか

そのとき死体は田をぐるりと動かした。

「行くがよい。どこまでも。」

地のそこの「なに」えのよつて、それは答えた。

そしてまた黙り込んで、哲人のよつて、微風に揺らめいているのだった。

影は今度は人の通つたこともない落ち葉の上をあてどなく、歩んでいった。

突然、樹上でけたたましく鳥が鳴いて飛び立ち一瞬沈黙は破られ音の陰鬱な我が広がつて消えた。

「なんて陰鬱な夜なんだ」

影が呟くと、その声が重く陰に籠り低く朽ちた葉の上に広がつていくのだった。

森が途切れると草原に出る。

果てしなく広がる草の波。月が虚空に懸かりその下にざわめくような草の波が切なく、荒涼とした心をかきむしるのだった。

胸まで草に漫かりながらゆるく行くと、影は消え去り朧な形象がうかびあがる。

干し一つ見えない空に、その垂れ込めた空に月がぼんやりかかっている。

風が吹き草がざわめき、やがてその形象は彼方の波間に遠ざかって消えていくのであった。

第11の夜景|画に終わる。

第1-2の夜景画・第1-3の夜景画

第1-2の夜景画に始まる

また、夜が来た。

一切は暗く、あたりを埋め尽くし私の後に引く影さえなかつた。私は口ウソクの火を吹き消し本を閉じた。

あたりに蝶の鱗粉のような生臭い闇が漂つていた。私は立ち上がり、ゆっくりと寝室へ歩いていった。

数々の甘美な夢や希望が私の中でいつしか、潰え去り、やがて恐ろしい幻の人魚たちが私の肩越しに痺れるような唾液を滴らせていくのであつた。

「いけない。戻るんだ。影が私の視界の中に立ち去へしていく。」

死人たちはゆっくりと、棺のふたを開けて身をもたげた。

青白い月光の下にあって、私の脳はなめくじで一杯になつていた。

ふと彼方を見やると、そこにはぬらぬらするような、赤い月が昇りかけていた。

そして、月の照らした中に私はふと、妹が来るような気がしてふるえた。

第1-2の夜景画に終わる。

第13の夜景[画]に始まる。

夜が生暖かく、私の周りにもあった。
私は沈んだ心を抱いたまま、そつと、起き上がった。

地下室に通ずる城の鉄門が低く軋み、風は静かにヒースの荒原を吹き渡り死んでいく老婆のみぎわの声のように響いていた。
私は死んだ妹のことを想つていた。

私は出かけなければならなかつた。

私が歩み始めると近くの森の中に、幾筋もの、美しく青紫に光るナメクジの群れが灯を燈し始めた。

ぼんやりと、青い燐のように、光るナメクジ。

私はその下を潜り抜けて、夜の陰気な原へ出て行つた。

第13の夜景[画]に終る。

第14の夜景画・第15の夜景画

第14の夜景画に始まる。

森が鬱蒼と繁つて いる夜、私はその中を一人で歩いていた。木の葉が静に散りだし、森は息を潜めていた。

遠くに薔薇の木があり、つむらときの花弁が揺れていた。

巨像の影が私の中でかげろうのようになたゆとい、それはひぐらしのよつこ私の耳の中にまで響いていた。

私は立ち止まり夜氣のなかに溶けかけている遠くの薔薇の木を見つめていた。

時間が流れていき、水晶に化石していくよつてな薔薇の花を私は放心した目で追っていた。

第14の夜景画に終る。

第15の夜景画

第15の夜景画に始まる。

私ははすっと物思いにふけつて、あるいていた。

その白い柵は遙か彼方まで続き、何か、閑散とした荒れ果てた町を
妖しげに彩っていた。

無言で通り過ぎていく、亡き乙女達の血まみれの靈気が私に微笑し
ていた。

私はなおも、池のほとりを音のない枯れ草の上を歩み続ける。

私の魂は揺らめき、滑りながら果てない幻覚の中へ落ち込んでいく。
私が再び目覚めたとき、既に夕べとなり、夜となっていた。
気が付けば昨夜のままに、古びた机に向かいペンを持ったままで、
眠っていたのだった。

私は昨夜疲れきって町のざわめきの中から帰つてきた。
頭痛が襲い背中には冷たいミイラの歯形さえ付いていた。

私は扉を開きそしてこの机に向かった。
ランプを点けやつと静もつてくる光の中でペンをとつ心の中のわだ
かまつた血色の夜のものがたりを書こうとしたのだ。
私は昨夜の記憶をたどり始める。しかし、思わず眩暈を感じしゃが
みこんでしまう。

冷たい汗が吹き出し、心音が過敏に感ぜられるのを必死にこらえた。
やがて治まつてみると私はゆっくりと立ち窓のところへ急いだ。
想いカーテンを押し開け私は外を見た。

冷たい石の歩道に人影はなく、街灯だけが青く路面を照らしていた。

私は冷気が押し寄せてくるガラス窓に頬をつけ、なおもぼんやりと見下りしていた。

ふと、背後に何かを感じて振り向いた。

底には白い寝室衣の妹が立っていた。

妹はまるで、つずまく妖気のように佇みやがて消えた。

そして、私の中に再び拭いがたい疲労がのしかかってくるのを感じるのだった。

最後の夜景画ここに終わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9687f/>

一五枚の夜景画（散文詩集）

2010年10月20日12時29分発行